

平成30年6月19日放送



## 血管外科の病気について

総合病院土浦協同病院  
血管外科 科長 内山英俊

司会者：血管外科というとあまり聞きなれない方もいるかと思いますがどのような病気を対象としているのでしょうか？

内 山：血管には心臓から血液を送り出す動脈と心臓へ血液を戻す静脈があり全身に広がっていますが、その中で心臓と頭の血管を除いた全身の血管の病気を対象としています。病気といっても血管は管ですので大きく分けると太くなってしまいう病気と狭くなってしまいう病気ということになります。動脈が太くなってしまいうのは動脈瘤で、全身の動脈にできますが、特に多いのは胸部や腹部の大動脈にできる大動脈瘤という病気で時々聞かれるかもしれません。反対に動脈が狭くなったり詰まってしまいう病気の中で多いのは下肢の閉塞性動脈硬化症という病気で、歩行しているとふくらはぎが痛くなってきて休むとよくなるといった間欠性跛行という症状がみられることがあります。静脈に関しては身近な病気では下肢の静脈がぼこぼこ太くなって蛇行してしまいう下肢静脈瘤という病気で、実際に見たことある方も多いかと思います。

司会者：全身の血管の病気を対象としていて、特に多いのは大動脈瘤、下肢の閉塞性動脈硬化症、下肢静脈瘤ということですね。それでは、それぞれの病気についてももう少し詳しく教えてもらってもいいのでしょうか。まずは大動脈瘤についてお願いします

内 山：大動脈瘤は、体の中で最も太い血管である大動脈がふくらんでしまいう病気です。破裂するまで症状が出ないことが多いですが、大きくなってくると胸部大動脈瘤では声がかすれたり咳が出たりすることがあったり、腹部大動脈瘤では腹痛や腰痛、おへそのあたりに拍動する腫瘍を触れるといった症状がみられることもあります。最近ではCT検査やエコー検査もよく行われるようになってきており検診やほかの病気の

検査で偶然見つかることも多くなっています。破裂をすると 70 - 90%の方は助からないといわれており、破裂する前に治療をすることが大事になります。

司会者：破裂するまで症状が出ないことが多く、破裂すると助からないというのは恐ろしい病気ですね。下肢の閉塞性動脈硬化症はどういった病気でしょうか。

内 山：動脈硬化が進むと血管の壁が石灰化して硬くなったり、血管の中が狭くなってきます。このことによって脚に行く血流が少なくなって症状が出てきます。症状としては、長時間歩いたり、坂道や階段を上るとふくらはぎが痛くなって、休むとよくなりまた歩けるようになるといった間欠性跛行という症状が見られたり、さらに悪化して重症になるとじっとしていても足の先が痛くなったり、潰瘍・壊疽に進行するといったことが起こります。ただ動脈硬化は下肢の動脈だけではなく心臓や脳の血管を含めた全身の動脈に起こってきますので、よく聞く心筋梗塞や脳梗塞といった病気と関連した病気ということになります。閉塞性動脈硬化症の患者さんは、高齢化や食生活、生活習慣の変化とともに増加してきています。治療に関しては、心臓の血管とは異なって閉塞してもすぐに命にかかわるというわけではないので、病気があつたらすぐに広げるといった治療を行うのではなくまずは症状に合わせて薬での治療や運動療法を行うことになります。それらの治療で改善が見られなかったり、日常生活に支障があるようであれば、カテーテル治療や手術といった侵襲的な治療が行われます。

司会者：下肢の血流が悪くなって長時間歩いたりするとふくらはぎが痛くなるといった症状が出てくる病気で、心筋梗塞や脳梗塞といった病気とも関連があるということですね。では、下肢の静脈瘤についてはいかがでしょうか。

内 山：下肢静脈瘤は、日本でも 1000 万人程度の患者さんがいるといわれているほど多くの方がなっている病気です。下肢の静脈は下から上へと心臓に向かって血液を流していますが、重力の関係で血液は下にたまるうとします。そこで逆流を防ぐために一方向に流れる弁がついていますが、その弁が壊れると血液が逆流してたまってきて、血管が太くなってきます。これが下肢静脈瘤という病気で下肢の比較的浅い静脈に

起こります。症状は程度によって様々ですが、夕方や夜になると足がだるくなったりむくんだり、寝ているときにこむら返りが起こったり、ひどくなると皮膚炎を起こして皮膚が黒ずんできたり、潰瘍ができてりすることもあります。何より血管がぼこぼこ浮き上がってくると、特にこれから夏にかけて暑くなってきて足を出すことが多くなると、見た目の問題も出てきます。悪い病気ではないですので治療は静脈瘤があるからと言ってすべてしなければいけないというわけではなく症状を見ながらということになります。ただ皮膚炎や潰瘍までなってしまうたら積極的に治療が勧められます。

司会者：これらの病気はどのような人がなりやすいのでしょうか？

内 山：大動脈瘤や閉塞性動脈硬化症といった動脈の病気は、動脈硬化の進行とともになることが多いですので、糖尿病や脂質異常症、高血圧といったいわゆる生活習慣病といわれる病気を持っている方やたばこをたくさん吸う方に多くなってきます。また加齢とともに多くなってきます。大動脈瘤は男性や60歳以上も危険因子として挙げられておりますので、症状がなくても高血圧などの病気がある60歳以上の男性は一度検診や人間ドッグなどで腹部の超音波検査やCT検査などを行って確認しておいてもいいかもしれません。下肢静脈瘤は、立ち仕事の長い方や妊娠・出産で悪化することが知られており、また家族でなっている方も多く遺伝的な要素もあるといわれています。

司会者：ではこれらの病気の治療はどのように行われるのでしょうか

内 山：血管外科の手術は、ここ十数年大きく変化してきておりカテーテルなどを使用した血管内治療が多くなってきています。動脈瘤に関しては、従来は胸を開けたりお腹を開けたりして直接動脈瘤に到達して人工血管に置き換える手術を行っておりましたが、今は足の付け根の血管からカテーテルを入れて血管内で人工血管を組み立てて入れてくるステントグラフト内挿術といった手術が増えてきています。下肢の閉塞性動脈硬化症に関しても従来は狭くなったり詰まっているところを取り除いたりバイパスをして迂回経路を作ったりして手術をしておりましたが、カテーテルで血管の中から風船で膨らませたり金属の網状の筒であるステントを入れて広げたりしています。静脈瘤に関しても従来は壊れた血管をとってくる抜去術というものが行われておりましたが、

最近はカテーテルを挿入して血管の内側から血管を焼いて閉塞させる焼灼術が広く行われるようになってきています。このようにより体に負担の少ない低侵襲治療に代わってきており、これらの治療は新しい道具の開発とともに進歩してきていてこれからも発展していくと思われます。治療の進歩によって今までは全身の状態が悪く治療を受けることができなかつた方でも治療が可能となってきました。ただ、すべてが低侵襲な血管内治療が適しているわけではなく、病気の状況によっては血管内治療ではなく従来の手術が適していたり、従来の手術とカテーテル治療を組み合わせたハイブリッド手術が適していたりすることもあります。

司会者：治療法も変化してきており、患者さんそれぞれに適した治療を選択していく必要があるということですね。

内 山：治療は進歩してきており、また今後もさらに進歩していくと思いますが、やはり手術ですのでいずれも100%うまくいくといったことはありません。病気になってから治すよりも病気になることが、予防がより重要になってきます。特に血管の病気に関しては動脈硬化を予防すること。加齢による変化は防ぎようがありませんが、糖尿病や高血圧、脂質異常症などといった生活習慣病が進行を助長しますし、肥満や喫煙も大きな原因となります。日常から食生活に気を付けて、適度な運動をすることが大切になります。さらにタバコを吸う方は禁煙が絶対的な条件となります。人は血管とともに老いるともいわれていますので生活習慣を改善して動脈硬化を予防し健康な血管とともに健康な生活を長く送っていただければと思います。

司会者：血管の病気に関しては生活習慣病の予防と喫煙をしないことが大切ということですね。今回は血管外科の病気についてお話しいただきました。本日はどうもありがとうございました

内 山：ありがとうございました